

■ 「平成19年度 建設施工と建設機械シンポジウム」開催報告 ■

-----優秀論文賞3編、優秀ポスター賞3編を表彰-----



社団法人日本建設機械化協会主催による「平成19年度 建設施工と建設機械シンポジウム」が、平成19年10月18日(木)～19日(金)の二日間にわたり、東京都港区の機械振興会館において国土交通省、経済産業省、(独)土木研究所、(社)土木学会、(社)日本機械学会、(社)地盤工学会および(社)日本機械土工協会の後援のもとで開催された。

本シンポジウムは建設機械と施工法に関する技術の向上を図ることを目的に、機械による施工が普遍化し施工と機械が一体化している現状を踏まえて日頃の研究・開発の成果を発表した。

産学官から寄せられた29編の論文および初の試みであるポスターセッションに12編の応募があり、5分野に分けて三つの会場で発表されそれぞれ活発な質疑が行われた。

応募論文の中から選考委員会で1次選考として厳正に査読・審査し、当日の発表内容の2次選考の審査結果を加味して、次の3編に対し優秀論文賞が、またポスターセッションでは同じく3編に優秀ポスター賞が授与された。

◆優秀論文賞◆

(1) 人道支援のための対人地雷除去機の開発

○柳樂篤司、中上博司 (株)小松製作所

国際貢献が大いに期待される社会的に意義のある開発研究で、機械化による安全で効率的除去の必要性を訴えるメッセージ性の強いプレゼンテーションであり、目標、内容、成果が明確な論文であった。

(2) ボランティアでも容易に操作可能な排泥装置の考案

○本間政幸、以倉直隆、高井謙一 (国土交通省 北陸地方整備局 北陸技術事務所)

災害時のボランティア活動を支援する実用的な装置の開発で、地味であるが意義の大きな開発として高く評価される。機械開発のプロセスが明確で分かりやすく、説明も明快であった。

(3) 塵埃の可搬式分別装置の開発

○村上大幹、保坂賢二 (国土交通省 関東地方整備局 関東技術事務所)

テーマは今日的課題として当を得ており、課題をクリアして実用化を早急に計って欲しい技術である。実用まで未だ開発の余地は残しているが、開発の継続とスピードアップが望まれる。



◆優秀ポスター賞◆

(1) 「動的ロードセルの寸法が測定荷重値に与える影響」及び「衝撃加速度に与える接触面積の影響」 2テーマ

○木村 修一、近藤 博司 (東海大学)

高速度の衝撃的な現象に関し測定技術上見過ごされがちな事項を指摘しており、破壊などの研究に際して考慮すべき点を提言している。強度評価に関連する、ロードセル使用の際の動的問題について分かりやすく説明され、価値が高い。

(2) 水中ウォータージェットにより生じるキャビテーションを用いた汚染物質の分解に関する基礎的研究

○木崎 彰久、松木 浩二、井上 千弘 (東北大学)、古田 哲朗 (ジャパンエナジー石油開発(株))

新しい技術で新規性が高い。説明も分かりやすく、視覚的にも良いポスターと言え、将来性を感じる。

(3) 路面反射音による排水性機能評価手法の開発

○小林 弘朗、本間 政幸 (国土交通省 北陸地方整備局 北陸技術事務所)

排水性舗装の検査で、吸音率に着目し、よく研究・検証されている。ポスターも分かりやすい。早く実用化して欲しい。

◆特別講演、施工技術総合研究所研究報告、機械部会活動報告◆

下記の講演、報告を行うとともに、本協会の施工技術総合研究所の研究発表および機械部会の成果報告も併催された。

特別講演 演題:「超速ハイパーヒューマン技術が開く新しい世界を覗いてみよう！」

講師:大阪大学大学院工学研究科 工学博士 金子 真 教授

特別報告 演題:「高松塚石室解体機械について」

報告者:株式会社 タダノ 技術研究所 企画調査ユニット マネージャ 山本耕治 様

厳しい環境、多数の建設会社の参加自粛にも関わらず、参加者は160名に達し活発な質疑が行われ成功裡に終了した。